



## エチオピアの歴史を変えた女たちの肖像

テケステ・ネガシュ 著

ベリット・サフルストローム タペストリー

眞城百華・石原美奈子 共訳 東京 上智大学出版 2024年 119p.

本書は5枚のタペストリーの写真とともに、そこに紡がれた5人の女性を通してエチオピアの歴史を描いた本である。本書掲載のタペストリーは、2018年に南山大学およびアジア経済研究所図書館において企画展も行われている。本書に登場するのは、エチオピアの女王アハイエワ、女王マケダ、王妃エレニ、王妃タイトゥ、そして、イギリスの政治活動家シルヴィア・パンクハーストである。4世紀から20世紀までの各時代に生きたこの女性たちはそれぞれ、キリスト教受容から近代国家の建設、さらには列強によるアフリカ分割期の独立維持など、エチオピア史の重要な転換点となる出来事において、大きな役割を果たした。

ここでは紙幅の関係から王妃タイトゥを取り上げ、本書に描かれている彼女の活躍を簡単に紹介したい。王妃タイトゥは、19世紀後半にエチオピアを近代国家として建国したメネリク2世の王妃である。この時期は列強によるアフリカの植民地分割が行われたが、そのなかでエチオピアはリベリアとならび独立を維持した数少ない国である。エチオピアが国家の独立を維持するにあたり、タイトゥは外交や軍事において大きな役割を果たした。1889年にエチオピアがイタリアと締結したウチャレ条約のイタリア語版第17条には、アムハラ語版にはない、イタリアによるエチオピアの保護領化の記述があった。双方はこの齟齬をめぐり交渉を重ねるが、結果として交渉は決裂して戦争に突入、最終的には1895年のアドワの戦いによってイタリアが大敗した。この条約第17条をめぐるイタリアとの交渉の場には、タイトゥが常に同席し、彼女の同意なしにはいかなる合意書も結び得なかった。そして、戦争突入後も彼女は自らの軍隊を用いて戦争に参加し、軍事的な戦略家としても活躍した。

本書は、通史では言及されることの少ない女性たちの活躍を通して歴史を見直す機会を与えてくれる貴重な書である。また、エチオピアがはるか昔から優れた女性の指導者を輩出してきた国であったことを教えてくれる書でもある。一つ残念な点があるとすれば、エチオピアの歴史に対する基礎知識なしで本書にあたる読者には、一読では各女性たちの活躍を歴史の流れのなかに位置付けながら読むのが難しい点だろうか。ただし付録の解説が充実しているので、あわせて何度か読み直すことでエチオピアの歴史への理解がより深まると思われる。

岸 真由美 (きし・まゆみ/アジア経済研究所)

